

令和6年度 第1回岐阜市立図書館協議会 議事概要

日 時：令和6年8月5日（月）午前10時30分～12時10分

場 所：みんなの森 ぎふメディアコスモス 第一会議室

出席者：【会場10名】久世均委員（会長）、高橋綾子委員（副会長）、
門屋伸子委員、永田洋介委員、浅井彰子委員、
大野正子委員、神尚喜委員、平賀研也委員、
多田知美委員、棚村勇夫委員

【オンライン1名】嶋田学委員

【欠席3名】河合美佐子委員、いずみ凜委員、小野寺華委員
（事務局）長尾館長、野々山副館長、土谷係長、富長係長、
川瀬係長、塩谷係長、野村副主査

傍聴者：なし

議事概要：

■報告や事務局提案に対する委員からの意見

（１） 令和6年度事業計画について
・ おはなし会に来る利用者が少ない時が多いので、もう少し宣伝に力を入れてもよいのではないかなと思う。おはなし会などの活動が活発になって子どもたちの笑顔が増えることを願っている。 ・ 子ども司書は開設時からラジオ番組を持ち、毎月第3日曜日に企画会議、第4日曜日に公開収録している。子どもならではの発想の企画と大人顔負けの放送を行い、いつも感心させられている。 ・ 中央図書館では対面読書をしているが、分館や図書室でも対面読書の提供があると、来館困難者向けサービスの観点からも検討していただけないかなと思う。 ・ 図書館の事業計画を聞き、それぞれとても素晴らしい事業だと思うが、広報機会を増やすことでもっと参加者も増えて活発な活動になるのではと感じた。 ・ 全国平均からしても正規職員の比率が少ない印象を持った。いろいろ努力しているようだが、政策形成能力といった点で、正規職員の比率がもう少し上がればいいと思う。
（２） 岐阜市立図書館内の連携及び市内各公共施設等との連携について
・ 「連携」とか「協働」という言葉を皆言うが、実は自分の立場によって「何を一緒にやろうか」と言っただけで何かが起こるわけではない。そういう意味で学校連携は「同じプロジェクトをする」、つまり役割分担をするのではなく図書館と学校で同じことに取り組むところから始まると本当の意味での連携になると思う。一緒にプログラムを作っていくことをするとスムーズに行けると思う。「何かを提供

しなくてはならない」という考え方では負担感ばかりが大きくなりみんながつかなくなるが、「ぜひ一緒に（プロジェクトとして）やりましょう」という体制を作っていくことをお勧めする。

- ・ 「岐阜市立図書館内外連携について課題」の「学校連携室が充分機能しているとはいえない」の中で3つの“いえない”という部分があるが、この要因分析は進んでいるのか。資料にある連携会議の中で全職員によって意見交換がなされているのかが気になった。平賀委員からも「みんなでつくる」とあったが、課題分析を若手もベテランも織り交ぜたワークショップ形式で全員参加できる場がつけれるといいと思う。経験豊かな副館長がスーパーバイザーとして巡回し意見交換するのもよいが、それと組み合わせる若手によるネットワークづくりも民主的なチーム作りに良い影響があるので、両方がバランスのよいプログラムが組めるとよい。また、粘り強く教員向けの取組みも強化していけるとよいと思う。
- ・ 図書館は今、本だけではなくデジタルも含め多くの情報資源を一緒になって活用できるはずだ。これは教員側も学校司書側もそのことを改めて考えようという段階に来ていることでもある。嶋田委員も言っているように皆の意識が変わらないとしょうがない。「教員と司書と手を組もう」「連携しよう」「協力しよう」と言っても変わらない。具体的に「何年生の何単元」あるいは「総合的な学び」「探求的な学び」を何年生に向けて行うにはどうするかを一緒に話をしないと気が付かない。そこに公共図書館の司書も一緒にいる意味、公共図書館のマネジメントも一緒にいる意味がある。
- ・ 様々な機関が自分たちの役割を重ねること、皆がそれぞれつながる“のりしろ”を持っているはずなので、一緒に考えれば、一緒に何かを実現するというのを考えていくことが大事な部分だと思う。そういう意味でここは素晴らしい複合施設で、様々な機能が中にあるという意味で、どう一緒にプロジェクトを作るかということが大事だと思う。
- ・ JR岐阜駅前の図書館の名称が「分館」というのは無個性だと思う。公募で愛称を募集して注目を集める契機になればよいと思う。
- ・ 今日の話の中で“司書のスキル”とは何かと思った。特にここ1、2年にできた複合文化施設を見ても、国の施策としても図書館司書に求められているものがかなり違ってきているように思う。ひょっとしたら司書の中にはメディコスがすごく大好きで司書になったが「なぜこんな仕事までやらされるの」ということがあるかもしれない。いま時代や社会の要求と司書のスキルが乖離していないだろうか。データで見ると正規職員の比率、パートタイム男女比は女性が圧倒的に多いと思うが、“やりがい搾取”にならないような、スタッフが必ずしも有資格者でなくてもよいのではないか。司書資格がないとここでは働けないというのではなく、仕事のバランスを見てもっと様々な業種の人間が入るアートセンター的な、

これはメディコス全体で考えた人事構成を、10年目以降設計していく必要があるのかもしれない。同じ人数・ルーチンでこれだけの数の事業をこなしていくとなると、新鮮だったメディコスが1、2年で色褪せていくことになってはいけないと思う。現状いる職員にやりがいと、もう少し先を見通した戦略を立てていけるようになればと思う。

- ・ 目に見えていたがなかなか手が付かなかった課題について整理をし、もう少し分析して具体案を出して欲しいと思う。
- ・ 学校連携に取り組んだ後また現場に戻って面白い教育展開ができるなどの人事交流がある。ウィンウィンの関係でできるならば、例えば図書館の司書が学校へ行けたらよいが、市の中でこそできる人事的な交流を仕事の中でできるとよい。あれもこれもと担当をつけて改善しようではなく、人事交流で入れ込むこともありえるのではないかと今日話を聞いていて思った。
- ・ ファッションライブラリーについてももう一步踏み込み、ファッションが得意な司書や学芸員的な人材を導入すると駅で面白く展開できるのではないかなと思う。
- ・ 人のことを第一に、人がちゃんと働きやすく、やりがいを持てるようなことを実際にやっていただかないと、次が厳しくなると思う。